

2023年9月20日

研究休暇報告書

南山大学長

ロバート・キサラ 殿

所 属 人文学部人類文化学科

職氏名 教授 吉田 竹也

期間： 2022年9月16日～2023年9月15日

目的： 周縁的観光現象の人類学的研究のため

1年間にわたる研究休暇期間中の活動について、下記の通りご報告申し上げます。

記

1. 研究目的と進捗について

今回の研究休暇において、私は、2020年3月に南山大学学術叢書として出版した単著『地上の楽園の観光と宗教の合理化』をまとめる過程において着想を得た「周縁的な観光現象の人類学的研究」の追究を目的に設定し、これを具体的な研究トピックとの関連においてまとめる作業を進めました。「世界リスク社会」ともいわれる現代社会において複雑化し多様化し肥大化しつづける観光を、先行研究のようにその中核的な特徴や事象ではなく周縁的な事象に照準を合わせて、民族誌的記述を積み重ねていく、というのがこの研究の主題です。

本研究は、2022年度までの4年間取得した科研費（基盤C）による研究と連動します。この科研による研究は、新型コロナウイルス感染症拡大によって、とくにインドネシアのバリ島において予定していた調査・資料収集活動を思うように進められなかったことから、2023年度までの1年の延長を申請し認められ、研究休暇中に継続して資料収集と議論構築作業を行うことができました。研究休暇中にデスクワークとフィールドワークを組み合わせ、以下の研究トピックについて具体的な議論の進展をはかりました。

① 「観光」概念の抜本的再考

南山大学人類学研究所の共同研究「人類学・考古学の「大きな理論」と「現場の理論」（2019～2021年度）において、観光概念の定義についての理論研究を進めました。共同研

究の成果である単著論文「観光の定義の困難さについて」を、2023年3月に『人類学研究
所研究論集』第12号に掲載・刊行しました。この論文は、「周縁的観光現象の人類学的研
究」の理論的・方法的な基盤となり、『周縁観光論』第1章のベースになりました。

② 奄美・沖縄の世界自然遺産観光

2021年に日本で5番目の世界自然遺産となったこの地域の観光化について、日本島嶼学
会学会誌2021年2月号に発表した査読付き論文「アノマリーとしての世界自然遺産——奄
美・沖縄の事例に関する観光リスク論的考察」を発展させ、島嶼学会2022年次で「奄美・
沖縄の世界自然遺産と観光」（2022年10月）を発表しました。これにさらなる記述や論点
を付加し、保全が重視される世界自然遺産の周辺地域における観光地化に関する事例考察
を進め、これを『周縁観光論』第2章にまとめました。

③ ひめゆりの塔周辺の「霊域」の観光地化

沖縄地上戦において多数のひめゆり学徒が死亡した壕には、戦後まもなく「ひめゆりの塔」
が建立されました。ひめゆり同窓会は、当初この壕と塔のある場所を「霊域」と認識し、俗
なる観光地化から守ってきましたが、戦後40年以上を経て、ここに平和記念資料館を建設
しました。その後、この場所は沖縄本島南部を代表する観光スポットとなりました。ひめゆ
り同窓会については、非営利組織の研究という観点から、2019年に単著論文を書きまし
たが、今回、観光の周縁的現象の探究という観点からあらためて議論枠組みと民族誌的記述を
再整理し、観光の外部——これも「周縁」に相当します——におかれていた「霊域」を、観
光の内部に取り込んでいった同窓会の取り組みがもつ意味を、コロナ渦中の出来事にも触
れながら考察し、これを『周縁観光論』第3章にまとめました。

④ バリ島の日本人移住者＝観光者の研究

インドネシアのバリ島にはおおくの日本人移住者がおり、私は30年近くにわたって、あ
る観光地で彼らへのインタビューを継続してきました。彼らは、観光者と移住者の中間に位
置する周縁的な存在といえます。中には観光ビジネスに成功した人々もいますが、一方でビ
ジネスに成功せず結果的に帰国を余儀なくされる人々もいます。観光事業の成功者よりも
後者のようなマージナルな、つまりは周縁的な、観光主体に着目し、これを観光リスク論的
観点から捉える研究を進め、これを『周縁観光論』第4章にまとめました。なお、バリ島で
は、2019年8月以来となる2023年2月～3月の2週間と、2023年8月～9月の各2週
間、資料収集を行いました。

⑤ 新たな研究トピックの着手

以上の①～④は、いずれも「周縁的観光現象の人類学的研究」の柱となるトピックに関わ

る研究ですが、新たな研究トピックの探究作業もすこし進めました。そのひとつが、パラドクスの人類学的研究です。まだ構想の段階ではありますが、検討をはじめています。また、2023年7月にメッカ巡礼を果たした日本在住インドネシア人に予備的な聞き取りをはじめました。いずれも、今後研究成果に結実させるべく、営為作業を進めていく所存です。

⑥ 研究成果

上記①～④の「周縁的観光現象の人類学的研究」に関する研究のトピックを単著にまとめる作業に取り組み、これを『周縁観光論』にまとめ、人類学研究所から6月に刊行しました。ほかに、東南アジア学会誌に書評を掲載しました。研究休暇中の成果は、計4点です。

- ・ 学会発表「奄美・沖縄の世界自然遺産と観光」、単独、2022年次日本島嶼学会沖永良部大会、日本島嶼学会、2022年10月22日、フローラル館。
- ・ 論文「観光の定義の困難さについて——概念の脱構築から事実の記述へ」、単著、2023年3月、『人類学研究所研究論集』12号、南山大学人類学研究所、pp. 4-45. (42p.)
- ・ 単著『周縁観光論——観光サバルタンの把握に向けて』、人類学研究所モノグラフシリーズ第2号、2023年6月、人類学研究所。
- ・ 書評「書評・新刊書紹介 岩原紘伊著『村落エコツーリズムをつくる人びと——バリの観光開発と生活をめぐる民族誌』風響社（2020年）」、『東南アジア——歴史と文化』52号、2023年7月、東南アジア学会。

2. 研究休暇中の教育活動

2022年度Q3およびQ4においては、学部では学科必修科目「人類文化学演習」（4年次）および研究プロジェクトを、大学院では「研究指導」（博士前期課程）を担当し、学生の研究指導・論文指導を行いました。

2023年度Q1およびQ2においては、学部では学科必修科目「人類文化学基礎論A」および「人類文化学演習」（3年次）を、大学院では「研究指導」（博士前期課程）を担当し、学生の研究指導を行いました。

3. おわりに

研究休暇取得申請の段階で予定していた「周縁的観光現象の人類学的研究」について、単著の刊行までを研究休暇中に果たすことができました。研究のためのまとまった時間をいただいたことで、具体的な研究トピックを固めるとともに、全体の構想を熟考することができました。貴重な機会をいただきましたことを、あらためて感謝申し上げます。

以上